

平和の尊さ

奨励	大津 健一〔おおつ・けんいち〕
奨励者紹介	学校法人アジア学院 アジア農村指導者養成専門学校校長

主は国々の争いを裁き、多くの民を戒められる。
彼らは剣を打ち直して鋤とし
槍を打ち直して鎌とする。
国は国に向かって剣を上げず
もはや戦うことを学ばない。

（イザヤ書 2章4節）

平和を実現する人々は、幸いである、
その人たちは神の子と呼ばれる。

（マタイによる福音書 5章9節）

アジア学院

皆さん、おはようございます。ご紹介いただきました学校法人アジア学院アジア農村指導者養成専門学校の校長をしております大津と申します。私は、農村というより都市でずっと働いてきた人間ですので、農村の問題の専門家でこの学校に来たというより、むしろキリスト教の立場に立っておりますので、キリスト教のネットワークのなかで、アジア学院に来たといった方が正しいかもしれません。

学校は、栃木県那須塩原市にあります。新幹線が止まる駅の一つ手前のローカル線の西那須野駅の近くにある小さな学校です。毎年、アジア・アフリカ・太平洋州・ラテンアメリカ、特に開発途上国の草の根の農村指導者を招き、9カ月間、集中講座の形でトレーニングコースを行い、座学と同時に現場で身をもって有機農業を実習し、リーダーシップやコミュニケーションづくりについて、また、農村開発が何であるかを学んでいただいています。現場で学ぶということを大切にしている学校です。

アジア学院という名前がついておりますけれども、毎年アフリカから数名の学生も迎えておりますので、「アジア・アフリカ学院にしないのか」と言われることもあります。アジアに対する日本の植民地支配、侵略、そういうことに対する深い反省に立ち、この学校は1973年、高見敏弘という人によって始められました。高見さんは、この働き等を通して、アジアのノーベル賞といわれるマグサイサイ賞を受賞されました。そういう面では広く国際的にも認知された働きだと考えています。もうすぐ40年を迎えようとしています。

地震と放射能被害の中で

3月11日に起こりました東日本大震災では震度6弱にみまわれました。私たちの学校の建物も大きく揺れて、古い建物ですからかなりひび割れができました。その後、建築の専門家の方に診断していただきましたら、このままでは、この建物を使い続けるのは危険だということで建て替える必要があると言われました。それで今、私たちは緊急募金をして建て替えの準備をしております。幸い国内外の人たちから支援をもらって、かなりの寄付金が集まってきており、信仰的に言うならば、必要なことは備えられるということなのですが、そういう状況を今、与えられております。カトリックの方たちもプロテスタントの方たちも、広く私たちの働きをサポートしてくださっているというのが現状であります。

建物の被害、建物の再建ということでは、なんとかやりとげることができるかもしれません。一番問題なのは、放射能汚染問題です。福島原発から110kmほど、私どもの学校は離れているのですが、水素爆発が起きたとき、南向きの風が吹き、私たちの学校は、福島原発から出た放射能の通り道になりました。この間も政府から、那須町、那須塩原市、となりの大田原市、日光市、ここは栃木県でも放射能汚染地区だと指定を受けました。またそういうことがあると農業の町ですから、風評被害というのを被ります。私たちのところも土壌が汚染されていて、どうしても線量の高いところは土壌をひっくり返さなくてはなりません。上の土が放射能汚染されているので、その土をとって少し深く掘ったところに入れて、下の方にある土は汚染が、まだ進んでおりませんから、その土を上にかがせるという大変な作業をしております。これは地域の公立の小学校や中学校でも行われつつあります。町の人たちは声には出しませんが、非常に不安のなかで過ごしています。

一部の住民のなかには、住んでいた地域を離れていく人たちもおられます。放射能汚染の中、子どもたちの健康を考えると、ここにはいたくないということです。しかし、大半の人たちはそこから動けないのが現実です。

人々を苦しめる原発はいらない

マスコミを通して、反原発の人、原発が必要という人、いろいろな学者が出てきて、議論をしています。私たちも今回のことを通して原発はいらないと思っております。しかし、私たちには「反原発」だけで「原発はいらない」と批判するだけでは不十分だと思っています。この状況をどう切り抜けていくか。そのことを担いながら、「反原発」ということを、どのような形で担っていくことができるかを考えていくということが、私たちに課せられた課題であります。そこで、地域の人たちと一緒に『那須を希望の砦に』プロジェクトという組織をつくり、私も呼びかけ人の一人にさせていただいております。一緒に町の人たちと、この問題を考えていきたい。どういうふうにこの放射能汚染の問題を切り抜けていくことができるのか、ということを考え、毎日そのことが非常に大きな課題であります。関西の人たちには、福島や福島の近辺に住んでいる人たちの重荷や苦しみが、なかなか理解いただけないかもしれません。東北のなかで、地震の被害を受けられた方の苦しみ、特に地震と津波、そして福島原発の被害を受けられた人びとは、本当に二重にも三重にも苦しみを受けておられる。あの苦しみは、本当に計り知れない苦しみであります。それでも、原子力発電を使い続ける。人びとに苦しみを与え、大きな被害を地域全体に与え、自分の国だけではなくて近隣の諸国にも放射能をまき散らしている。この現実の原子力発電というものを、私たちが今後も豊かな生活をするために、使い続けていくことはどうなのかという、基本的な問いかけを受けているように思います。原発を使うことを止められなかったのは私たちの世代の責任ですが、これを使い続けていってよいのか考えていくのは皆さんの責任でもあります。ぜひ考え、そして私たちが、今後、どう進んでいくべきか。クリーンエネルギーなど、いろいろ議論がなされていますけれども、その方向性を、ぜひ見出ししてほしいということを願っています。野田首相が、この原発をベトナムやマレーシアなど、他の国にも輸出するということを言っていますが、考えても、考えても、なぜそのような考え方が出てくるのか。この国がそんなことでよいのか。現状で、こんなにも人びとに苦しみを与えているものを、なぜ他国へ輸出するのか。そういう問いかけも、この国の倫理問題として声をあげていく必要があると思っています。

アジア・アフリカの農村リーダーを育てる

私たちの学校のことを申し上げますと、農村で生活するアジアやアフリカ、それから太平洋州、ラテンアメリカから来ている方々は皆、非常に貧しい現実のなかにおられるわけで、その人たちを招いて、研修プログラムを実施しています。たとえば近隣の有機農家を訪問させていただくことや、西日本に研修旅行に行き、熊本の水俣で水俣病の被害者の方々との交流会や、広島を訪ねて被爆者の人たちとの交流会、そういうプログラムをもったりしております。11月5日には、同志社のハビタットという居住研究会のグループの人たちと一緒に、今出川キャンパスで交流会を行う予定です。研修プログラムが終われば、日本から、すぐにまたそれぞれの国に帰り、現場に戻っていただいて働きを続けてもらう。学校や課外プログラムで学んだことを生かして自分の国で役立てて欲しい、そのことを私たちは切に願っております。

グローバル化の時代のなかでも、日本は、やはり欧米にずっと目を向けてきたように思います。明治維新以来、脱亜入欧政策をとり、戦後、1945年以降私たちは脱亜入米というスタンスをずっととっていて、アジアの一員でありながらアジアを見下げて見ているような、そういう形でこの国が進んできたように思うのです。しかし、アジアやアフリカの人と出会い、アジア、アフリカの人がおかれている状況を理解することは、私たちにとって大切なことだと思います。私自身もアジアのことはわかりませんが、アフリカのことはよく知らないのです。だからアフリカの人たちと、どう接すればよいのか、どのようにコミュニケーションをとっていけばよいのか、とても戸惑いながら、アジア学院におります。でもアジアの人たち、アフリカの人たち、ブラジルとかハイチとかいろいろなところから人びとが集り、一緒に模索しながら、共同の場所と一緒に生活をする。そういうコミュニティづくりを心がけておりますので、もし将来、世界が国境を越えて一つになったときには、きっと私たちのような模索が、一つのモデルになっていくのではないかと。いろいろ違っている。皮膚の色も違うし、民族も違う。文化、宗教、言語、いろいろなことが違っている人たちが集まる。違っている人同士が集まって、同じ方向性を見出しながら向かっていくということは、地球家族とか、宇宙船地球号などと言いますが、決して簡単なことではないということを私も日々の生活のなかで感じております。でも、とてもよい経験をさせていただいております。

一番の問題は貧困問題

アジア、アフリカから来た学生たち、学生たちといっても農村の現場にいた人たちですから、単なる学生ということではありませんが、その人たちに「あなたたちの一番の問題は何ですか」と尋ねますと、だいたい決まって「貧困問題」という答えが返ってきます。貧困問題が自分たちの村の第一の問題。食べられるか、食べられないか。そのことが大きな問題だと言われます。それ以外には、内戦や気候変動による自然災害の問題。自然災害は、今もタイのバンコクでは、大洪水が起こっておりますけれども、アジア、アフリカの村で起こっている、いろいろな自然の変化を皆さんから聞くと、確実に地球に変化が起きている、異常気象が起きているということを、知らされるわけであります。

また、それだけではなく、アジア・アフリカの農民は、農業で農業を使います。化学肥料を買う。種を買う。自分たちが今まで育ててきた農作物の種が、きちんと保存されていない

ので、買わざるを得ない状況になっています。種も買い、農業も買い、肥料も買う。今、国連などでも、食糧増産ということが言われていますが、このことの延長線上で見えてくるものは化学的なものを使った近代農業であり、今後小麦とかお米、また遺伝子組替えの大豆とかコーンとか、そういうものをずっと食べ続けるということは、人間の体に与える影響は、今後非常に大きな問題になってくるのではないかと考えております。

彼らには、機械を買う経済力はありません。皆、貧しいわけですから、借金をして種を買い、肥料を買い、そして農業を買うための借金が膨らんでいって、貧しい人たちが、もう行き場がなくなり、自殺をせざるを得ないような状況に追い込まれる、そういう例がいくつか報告されています。

こういう状況にいる人たちが、一度、自然災害の干ばつ、大洪水などの被害を受けると、多くの人たちが餓死の危険のなかに追い込まれていく。たとえば、最近では、東アフリカのソマリアの例があります。国際連合食糧農業機関（FAO）によれば「このまま国際社会がソマリアの現実を放置するならば数週間以内に多くの餓死者が出る」と警告をしております。この多くの餓死者の中心にいるのが子どもたちであり、女性たちであります。私自身もマスコミを通してしか知りませんが、ソマリアの人たちが食糧を求めて首都に向かってずっと行進していくわけですが、その首都では、内戦が起こっている。お互いに民族同志で戦っている。しかし、そこにしか食糧がありませんから、内戦の起こっている所でも食糧を求めて移動していくような、非常に深刻な問題が起きています。餓死と内戦の危険のなかで人びとは食糧を求めてさまよっている。そういう姿が私たちの目の前に浮かんでくるわけです。

環境破壊の元凶は先進国

またビルマでは、2008年にナルギスと呼ばれるサイクロンで大変な被害を受けました。その被害を受けてから、一生懸命、回復の作業が行われているのですが、ネズミが異常発生しまして農作物を食い荒らしてしまう。一生懸命育てた農作物を、本当に多量のネズミが食い荒らしてしまう。だから食べるものがない。そのような状況が起こっているという、報告を受けています。

タイの大洪水や、最近では、アメリカのニューヨークで、10月に雪が降る異常な気象現象、いろいろなことを考えますと、地球環境が確実に悪い方向へと向いているということが考えられると思います。気候変動、一般的には地球温暖化と言われるよりはclimate change（気候変動）と言いますけれども、日本を始めとする先進国も非常に多くの影響を受けている。また、今、中国やインドの開発に伴う環境破壊への批判が起こっています。これから、もっと地球環境に対して悪条件を追加することになりますが、それまでの大きな責任は日本を含めた先進国が行った、私たちの豊かさを維持するために行った環境破壊ということが原因だと思います。そのなかで私たちの国が、原発はクリーンなエネルギーであるということを主張しているのです。ヨーロッパの国々、たとえばドイツでは、皆さんご存じのように原発を今後つくらない方針を示しています。他国でも、福島原発の事件以来、そのような方向に向いているのに、この国はなお、原発が必要だという声がなくなりません。どれだけ私たちは安全神話に振り回されてきたかを考えさせられます。しかし、福島原発事故後、いろいろなことが暴露され、いろいろな秘密資料が出てきて、原発の安全神話が崩れつつあります。原発事故で放出された放射性廃棄物を処理しきれないなど、様々な問題が起こり、私たちは次の世代にそれを残していく。今の世代の豊かさのために次の世代に重荷を残していくようなことを、今後も、私たちが平気で続けていっても良いのかどうか。そのような問いかけがあります。私たちは、どういう形でクリーンなエネルギーを見出すことができるのか。そして私たちのあり方そのものを、どこまで根本的に変えていくことができるのかということを考えていく必要があると思います。

私たちアジア学院のなかでは、できるだけ節約をし、電気をできるだけ使わない生活をしていこう。環境を悪化させるようなことはしないということを心がけておりますが、それでもこの国では、豊かさを享受している。そういう現実があるように思います。

世界の飢餓人口8人に1人

この10月末で世界の人口が70億になったことが報道をされておりますが、国連飢餓報告（2012年10月9日）では、現在飢餓で苦しんでいる人が8億7000万人、この地球上にはいるとされています。8億7000万人という、とてつもない大きな数字ですが、この人たちの状況は、この日一日の食事がきちんと与えられるか、与えられないか。そういうことも含めた飢餓の苦しみのなかにいる人たちであります。統計的には地球上の8人に1人が、飢餓に直面していると、そういうデータが出されておまして、その多くの人たちは、アジアやアフリカの農村の人びとです。特にアフリカのなかでは、ますます貧困問題が増大している。国際社会では、なんとか貧困削減の取り組みがなされていますが、その努力と裏腹に貧困人口が増えている。国連では、中国やインドの経済成長のことを言っていますが、中国やインドの農村に行かれ、どんな貧しい生活をしているのかということを知ったら、一部の大金持ちと多くの貧乏人の格差がますます国のなかで広がっていくことが見え、貧しい暮らしを強いられている人びとの不満が、いつか爆発するような時がくるのではないかと考えています。

私たちの生き方はこれでいいか

世界の中で多くの人びとが飢えて苦しんでいる現実があるのに、私たちの生き方や私たちの心に響いてこないのはなぜか、というのが非常にシンプルな問いであります。私たちの学校では、自給自足を心がけておまして、自分たちでお米・小麦・野菜をつくり、鶏・豚・牛を飼っています。養漁池も持っていますので、魚も鯉などを飼っています。それらを食料にした自給自足型を目指しております。また、地域の給食センターから小学校の子どもたちの食べ残しの残飯を毎日いただいで来ます。主にパンとご飯をいただきます。米粉と混ぜて、それを家畜の餌にする。そのなかで気になるのは、食べ残しに一口だけかじったパンがたくさん残っているということです。子どもたちが一口かじって、もういらないと食べなかったんだらうと思います。子どもたちの食べ残しとか、そういうものを見ると、ソマリアの子どもたちが餓死をするかもしれないという状況が起こっているのに、一方で、私たちは食べ残しを良しとしている。それは、子どもたちの責任だというだけではなく、親の責任であり、また同時代に生きている私たちの責任でもあると思うのです。私たちのスタッフの、ガーナから来ているバプテスト教会の宣教師でもあるティモテさんが、いつも言っています。アフリカにある地下資源、たとえばダイヤモンドの採掘権をめぐる、内戦が起こるらしいです。内戦が起こって血みどろの戦いをして、勝った者が採掘権を握るという形になっている。その採掘したダイヤモンドを販売するシステムをもっているのは欧米の資本家たちです。彼らがコントロールしている。アフリカに資源がないのではなく、オイルにしても、ダイヤモンドにしても、そういうものはすべて結局、最終的には先進国の資本家によってコントロールされている。だからいつまでたってもアフリカが豊かにならないということを彼は言っていました。ダイヤモンド一個買うたびに、そのダイヤモンドの背後に大きな血が流されているということを忘れないでほしいというのが彼の話です。そういう現実が今の世界にはあるのです。

食物を等しく分かち合う世界を

バプテスマ会をつくってアフガニスタンで活動されている中村哲さんが、アフガニスタンで灌漑設備や農業指導をされています。中村さんが言われることは、「二つの条件がそろえば、ほとんど世界の問題は解決する。一つは三度のごはんが食べられること。二つ目は家族が仲良く故郷と一緒に生活できること。この二つが揃えば世界の問題は解決する。世界の平和は来る」と言っておられます。僕らにとってはあたりまえですが、でも世界のなかにはそういう状態になることができない人たちがいて、苦しみを受けながら生きているわけです。今日の聖書、旧約聖書のイザヤ書2章4節のなかに「剣を打ち直して鋤とし、槍を打ち直して鎌とする」という言葉があります。戦いの状態を変えて、食べ物をつくるあり方を示唆しているという意味で非常に大切な言葉であると思います。遠い時代に語られた言葉ですが、そういう形で平和のあり方というものを模索することが大切です。私たちが今まで都市の視点に立って考えてきたことを、もう一度、農の視点で考えていく。農の視点というのは、私たち人間にはどうすることもできないものがあるということを、私たちに教えるものです。すべて人間の力ではコントロールできない。農業は、人間の力だけでなされるものではなく、自然のいろいろな恵みを頂いてなされるものです。やはり気候によって左右されますし、雨が降り、太陽が照ってくれないといけません。そういうことを知らされる世界だと思います。私たちは都市の論理や考え方に立って、すべて、技術や機械や化学、そして時には武力でコントロールできるというようなものの考え方に支配されていますが、自分たちの力だけでは、どうすることもできないものがあるという農の視点に立って、ものを考える、そういう考え方を模索して、食物を等しく分かち合える世界を構築していきたいと願っています。

2011年11月1日 同志社スピリット・ウィーク秋学期
今出川火曜チャペル・アワー「奨励」記録
2011年11月2日 同志社スピリット・ウィーク秋学期
京田辺水曜チャペル・アワー「奨励」記録